

**[D年] 公現後第6主日(2024年2月11日)**

**【旧約聖書日課】申命記 8章1～6節**

1今日、わたしが命じる戒めをすべて忠実に守りなさい。そうすれば、あなたたちは命を得、その数は増え、主が先祖に誓われた土地に入って、それを取ることができる。2あなたの神、主が導かれたこの四十年の荒れ野の旅を思い起こしなさい。こうして主はあなたを苦しめて試し、あなたの心にあること、すなわち御自分の戒めを守るかどうかを知ろうとされた。3主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖も味わったことのないマナを食べさせられた。人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった。4この四十年の間、あなたのまとう着物は古びず、足がはれることもなかった。5あなたは、人が自分の子を訓練するように、あなたの神、主があなたを訓練されることを心に留めなさい。6あなたの神、主の戒めを守り、主の道を歩み、彼を畏れなさい。

**【使徒書日課】**

**フィリピの信徒への手紙 4章10～20節**

10さて、あなたがたがわたしへの心遣いを、ついにまた表してくれたことを、わたしは主において非常に喜びました。今までは思いはあっても、それを表す機会がなかったのでしょう。11物欲しさにこう言っているのではありません。わたしは、自分の置かれた境遇に満足することを習い覚えたのです。12貧しく暮らすすべも、豊かに暮らすすべも知っています。満腹していても、空腹であっても、物が有り余っていても不足していても、いついかなる場合にも対処する秘訣を授かっています。13わたしを強めてくださる方のお陰で、わたしにはすべてが可能です。14それにしても、あなたがたは、よくわたしと苦しみを共にしてくれました。15フィリピの人たち、あなたがたも知っているとおり、わたしが福音の宣教の初めにマケドニア州を出たとき、もののやり取りでわたしの働きに参加した教会はあなたがたのほかにも一つありませんでした。16また、テサロニケにいたときにも、あなたがたはわたしの窮乏を救おうとして、何度も物を送ってくれました。17贈り物を当てに言うわけではありません。むしろ、あなたがたの益となる豊かな実を望んでいるのです。18わたしは

あらゆるものを受けており、豊かになっています。そちらからの贈り物をエパフロディトから受け取って満ち足りています。それは香ばしい香りであり、神が喜んで受けてくださるいけにえです。19わたしの神は、御自分の栄光の富に応じて、キリスト・イエスによって、あなたがたに必要なものをすべて満たして下さいます。20わたしたちの父である神に、栄光が世々限りなくありますように、アーメン。

**【福音書日課】ヨハネによる福音書 6章1～15節**

1その後、イエスはガリラヤ湖、すなわちティベリアス湖の向こう岸に渡られた。2大勢の群衆が後を追った。イエスが病人たちになさったしるしを見たからである。3イエスは山に登り、弟子たちと一緒にそこにお座りになった。4ユダヤ人の祭りである過越祭が近づいていた。5イエスは目を上げ、大勢の群衆が御自分の方へ来るのを見て、フィリポに、「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか」と言われたが、6こう言ったのはフィリポを試みるためであって、御自分では何をしようとしているか知っておられたのである。7フィリポは、「めいめいが少しずつ食べるためにも、二百デナリオン分のパンでは足りないでしょう」と答えた。8弟子の一人で、シモン・ペトロの兄弟アンデレが、イエスに言った。9「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます。けれども、こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう。」10イエスは、「人々を座らせなさい」と言われた。そこには草がたくさん生えていた。男たちはそこに座ったが、その数はおよそ五千人であった。11さて、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えてから、座っている人々に分け与えられた。また、魚も同じようにして、欲しいだけ分け与えられた。12人々が満腹したとき、イエスは弟子たちに、「少しも無駄にならないように、残ったパンの屑を集めなさい」と言われた。13集めると、人々が五つの大麦パンを食べて、なお残ったパンの屑で、十二の籠がいっぱいになった。14そこで、人々はイエスのなさったしるしを見て、「まさにこの人こそ、世に来られる預言者である」と言った。15イエスは、人々が来て、自分を王にするために連れて行こうとしているのを知り、ひとりでもた山に退かれた。

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## 申命記8章1～6節

<sup>1</sup>今日私が命じる戒めをすべて守り行いなさい。そうすればあなたがたは生き、数は増し、主が先祖に誓われた地に入り、これを所有することができる。<sup>2</sup>あなたの神、主がこの四十年の間、荒野であなたを導いた、すべての道のりを思い起こしなさい。主はあなたを苦しめ、試み、あなたの心にあるもの、すなわちその戒めを守るかどうかを知らうとされた。<sup>3</sup>そしてあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたもその先祖も知らなかったマナを食べさせられた。人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きるということ、あなたに知らせるためであった。<sup>4</sup>この四十年の間、あなたの着ている服は擦り切れず、足は腫れなかった。<sup>5</sup>人が自分の子を訓練するように、あなたの神、主があなたを訓練することを心に留めなさい。<sup>6</sup>また、あなたの神、主の戒めを守り、その道を歩み、主を恐れなさい。

## フィリピの信徒への手紙4章10～20節

<sup>10</sup>さて、あなたがたが私への心遣いを、ついにまた表してくれたことを、私は主にあって非常に喜びました。今までは思いはあっても、それを表す機会がなかったのでしょうか。<sup>11</sup>物欲しさにこう言うのではありません。私は、自分の置かれた境遇に満足することを学びました。<sup>12</sup>貧しく暮らすすべも、豊かに暮らすすべも知っています。満腹することも、飢えることにも、有り余ることにも、乏しいことにも、ありとあらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。<sup>13</sup>私を強めてくださる方のお陰で、私にはすべてが可能です。<sup>14</sup>それにしても、あなたがたは、よく私と苦しみを共にしてくれました。

<sup>15</sup>フィリピの人たち、あなたがたも知っているとおおり、私が福音の宣教の初めにマケドニアから出かけて行ったとき、会計を共にしてくれた教会は、あなたがたのほかにも一つもありませんでした。<sup>16</sup>テサロニケにいたときにも、あなたがたは私の窮乏を救おうとして、何度も物を送ってくれました。<sup>17</sup>贈り物を当てにして言うわけではありません。むしろ、あなたがたの帳簿を黒字にする実り

を求めているのです。<sup>18</sup>私はあらゆるものを受け取り、有り余るほどです。そちらからの贈り物をエパフロディトから受け取って、満ち足りています。それはかぐわしい香りであり、神が喜んで受けてくださるいけにえです。<sup>19</sup>私の神は、ご自分の栄光の富に応じて、キリスト・イエスによって、あなたがたに必要なものをすべて満たしてください。<sup>20</sup>私たちの父なる神に、栄光が世々限りなくありますように、アーメン。

## ヨハネによる福音書 6章1～15節

<sup>1</sup>その後、イエスはガリラヤ湖、すなわちティベリアス湖の向こう岸に渡られた。<sup>2</sup>大勢の群衆が後を追った。イエスが病人たちになさったしるしを見たからである。<sup>3</sup>イエスは山に登り、弟子たちと一緒にそこにお座りになった。<sup>4</sup>ユダヤ人の祭りである過越祭が近づいていた。<sup>5</sup>イエスは目を上げ、大勢の群衆がご自分の方へ来るのを見て、フィリポに言われた。「どこでパンを買って来て、この人たちに食べさせよう。」<sup>6</sup>こう言ったのはフィリポを試みるためであって、ご自分では何をしようとしているか知っておられたのである。<sup>7</sup>フィリポは、「めいめいが少しずつ食べたとして、二百デナリオンのパンでは足りないでしょう」と答えた。<sup>8</sup>弟子の一人で、シモン・ペトロの兄弟アンデレが、イエスに言った。<sup>9</sup>「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます。けれども、こんなに大勢の人では、それが何になりましょう。」<sup>10</sup>イエスは、「人々を座らせなさい」と言われた。その場所には草が多かった。それで、人々は座った。その数はおよそ五千人であった。<sup>11</sup>そこで、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えてから、座っている人々に分け与えられた。また、魚も同じようにして、欲しいだけ分け与えられた。<sup>12</sup>人々が十分食べたとき、イエスは弟子たちに、「少しも無駄にならないように、余ったパン切れを集めなさい」と言われた。<sup>13</sup>集めると、人々が大麦パン五つを食べて、なお余ったパン切れで、十二の籠がいっぱいになった。<sup>14</sup>人々はイエスのなさったしるしを見て、「まさにこの人こそ、世に来るべき預言者である」と言った。<sup>15</sup>イエスは、人々が来て、自分を王にするために連れて行こうとしているのを知り、独りでまた山に退かれた。

**黙想のためのノート****次主日の教会暦と聖書日課**

・2月11日「公現後第6主日」の日課主題は「奇跡を行うキリスト」。

・旧約聖書日課は、「申命記」から、荒野時代の「マナ」の出来事を「神の言葉」についての示唆的教訓として振り返る箇所。使徒書日課は、「フィリピの信徒への手紙」から、パウロがフィリピやテサロニケの教会からの支援の贈り物に感謝を示す箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、「パンの出来事」の箇所。

**旧約日課(申命記 8章より)**

・「申命記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書=旧約聖書)「律法(トーラー)」の第五巻で、「出エジプト記」から展開していた「モーセ物語」の完結編を構成する。本書の主要部分(1~28章)は、エジプトを出てから40年の旅を重ねたイスラエルの民に対して、指導者モーセがこれまでの旅路を振り返りながら「シナイ契約」で与えられた「律法」の内容と意義を再確認する教説として構成されている。「申命記(英語ではデューテロノミー)」という書名は、モーセが「律法を再度命じた書」という本書の内容から付けられた。

・日課箇所は、荒野時代のことを振り返りながらイスラエルが主なる神に聞き従うべきことを繰り返し説く部分(6~11章)の一部。特に荒野の日々に「天からのパン」として与えられた「マナ」が「神の言葉」を象徴的に指し示すものであったと比喩的解釈を明確にし、「神の言葉」を日毎の必要に応じて与えられる「パン」として受け取り、養いの糧とすべきことが勧められている。3節「人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きる」は、新約の「荒野野の誘惑の逸話」の中で主イエスによって引用されていることでも知られる(マタイ 4:4、ルカ 4:4)。

・「マナの出来事」は、「出エジプト記」16章が説話伝承として伝え、さらに、それを踏まえた逸話が「民数記」11章で物語られている。「マナ」がどのようなものであったのかを、「出エジプト記」は「コエンドロの種に似て白く、蜜の入ったウェファースのような味がした」(出 16:31)と説明しているが、「民数記」はそれに加えて調理方法も説明しており(民 11:7~8)、実際に荒野で恒常的に採取される植物が想定されている。

・「戒め」(1節、2節、6節)は、ヘブライ語「ミツヴァー」の訳語で、「律法(トーラー)」五書中で52例が見られるが、内32例が「申命記」の用例。「出エジプト記」の「マナの出来事」中でも「わたしの戒め(ミツヴァー)と教え(トーラー)」(出 16:28)という表現で用いられているほか、「シナイ契約」の契約締結場面にも「教え(トーラー)と戒め(ミツヴァー)を記した石の板」(出 24:12)と、「トーラー(教え/律法)」と組み合わせて用いられている。「申命記」では、「トーラー」は記された文書としての「律法の書」等の用法で用いられ、「戒め」と組み合わせられた用例は見られない。

・「思い起こし」(2節、ヘブライ語「ザーカル」)は、広く用いられる用語だが、「申命記」では特異的に「あなたは思い起こしなさい(ヴェザーカルタ)」という語形で多用されている(5:15、8:2,18、15:15、16:12、24:18,22)。旧約中で他の用例は、Iサム 25:31の1例のみ)。また、これとほぼ同義的に「思い起こすこと(「ザーカル」不定形)」を用いた用法の「思い起こしなさい」の用例は、「出エジプト記」(13:3、20:8)と「申命記」(24:9、25:17)で見られる(「ヨシュア記」1:13も同じ用法の例)。これらの用例で対象とされているのは、「主のこと」、「主の御業(出エジプト、荒野の旅)」、「かつてのイスラエルの境遇」などで、もっぱら、「モーセ物語」で語られる故事に関してであり、その延長線上にある「ヨシュア記」で、「モーセの言葉」すなわち「律法の書」を「思い起こしなさい」という信仰観が提示されている(ヨシュア 1:8~13)。このような「想起」の実践に基礎づけられる信仰観は、「新約」において、「教え」や「出来事」を含む「主イエスの全生涯」に関しても当てはめられており、教会の典礼(礼拝、暦など)を基礎づけるものとされてきた。

**使徒書日課(フィリピ 4章)**

・「フィリピの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第6に置かれた書簡文書。使徒パウロが、シリア・アンティオキア教会から派遣されたバルナバ宣教団を離れて独自の宣教団を組織して伝道、教会創設したマケドニア州フィリピの教会に宛てて記されている。その経緯は、「使徒言行録」16章に伝えられているほか、同じマケドニア州のテサロニケでパウロの宣教団によって創設された教会と共に、「コリントの信徒への手紙二」8~9章でも言及されている。フィリピの教会共同体は、バルナバと別れたパウロの宣教活動に対する主要な経済的支援者であったと推認され、パウロが関与した他の教会共同体とは異なる特別に親密な個人的関係性が築かれていたと考えられる。

・日課箇所、パウロは、フィリピの教会から受け取っていた支援について感謝を述べている。フィリピで教会共同体の礎となったのは、「ティアティア市出身の紫布を商う…リディアという婦人」(使徒 16:14)であったとされる。ユダヤ人女性であったが、高級織物である紫布を扱う商人として紹介されており、おそらく商人であった夫の死後に事業を継承していた人であったと考えられる。そのような立場であったために、自分の意志で財産の提供をすることができたのかもしれない。このリディアの他にも、本書簡には、「エポディア」および「シンティケ」という女性の名が出てくる(4:2)。パウロは、フィリピの活動の後にテサロニケで活動、さらにアカイア州に移り、コリントの教会創設事業に参加することになるが、コリントでは一切の報酬や支援を得ておらず(Iコリ 9章を参照)、自身で収入を得るための副業もしていたとされ(使徒 18:3)、これらの時期に経済的な支援を受けていたのであろう。

**福音書日課(ヨハネ 6 章より)**

・日課箇所は、「パンの出来事」として伝えられる「五千人の給食の逸話伝承」の箇所。この逸話伝承は、四福音書が共通して伝えている逸話の一つで、初期教会にとって共通の基盤となる「主イエスの御業の出来事」であったと考えられてきた。逸話物語は、細部の設定まで含めて四福音書が共有しており、各福音書が独自に加筆している箇所は明瞭である。

・この逸話の場面設定として、「ヨハネ福音書」は、「ユダヤ人の祭りである過越祭が近づいていた」(4 節)と付言しているが、これは他の福音書では触れられていない。この付言によって、「ヨハネ福音書」は、「パンの出来事」を過越祭の「過越の食事」と結びつけようとしているのかもしれない。「共観福音書」(マタイ、マルコ、ルカ)では、「過越の食事」は、主イエスと弟子たちとが最後に共にした「最後の晩餐」として描かれ、主イエスの「十字架刑と復活」を「過越」の「出エジプト」と重ね合わせて理解しようとする意図が示されている。すなわち、主イエスが最後に弟子たちと共にした「過越の食事」が、「主の晩餐」に置き換えられるという神学的解釈が、ここに表されている。他方、「ヨハネ福音書」は、主イエスと弟子たちが共にした「最後の晩餐」(ヨハネ 13 章)は、「過越祭の前」の「夕食」(同 13:1~2)と位置づけられており、「過越の食事」であったと明言することを敢えて避けている。これは、「ヨハネ福音書」が、「主イエスの十字架刑執行」を「過越の食事」の準備として行われる「小羊の屠り」と位置づけるための操作と考えられる。そのような操作によって、「ヨハネ福音書」では、「過越の食事」と「主の晩餐」とを結びつける出来事として「最後の晩餐」を明示しにくくなっている。その欠けを補うために、「ヨハネ福音書」は、「パンの出来事」を敢えて「過越祭の前」に設定することで、「主の晩餐」の典拠として提示しようとしているのかもしれない。6 章後半も参照。

・この逸話物語の登場人物について、「ヨハネ福音書」は、他の共観福音書が伝えていない具体的な描写を加えている。五千人の人々に食事を与えるための準備について主イエスと話し合うのは、共観福音書では単に「弟子たち」であるが、「ヨハネ福音書」は、「フィリポ」や「アンデレ」の名を挙げている。彼らは、1 章で描かれた主イエスの弟子たちの列挙に含まれる、同郷ベトサイダ出身の者たちである(1:44)。「フィリポ」は、共観福音書では「十二人」の一人として紹介されるのみであるが、「ヨハネ福音書」では、この後も二度、主イエスと対話する弟子として描かれ(12:21~22、14:8~9)、そのうち一回(12 章)は「アンデレ」と共に登場させられている。この二人の役回りは、他の福音書では「ペトロ」や「ヤコブとヨハネ兄弟」に匹敵する。・また、「パン五つと魚二匹」の出どころとして、「少年(パイダリオン<パイス)」が登場させられている。この「少年」については、何の情報もない。主イエスは「王の役人の子供(パイディオン)」(1:46~53)を癒した。

・この「パンの出来事」の結末で、主イエスが「人々が来て、自分を王にするために連れて行こうとしている」と認識していたと描かれている。主イエスを「イスラエル<sup>キ</sup>ユダの王」と呼ぶかどうかは、受難物語を貫く主題である(ヨハネ 12:13~15、18~19 章)。しかし、人々がそのことを期待するようになったきっかけが「パンの出来事」であったとするのは、「ヨハネ福音書」だけである。「ヨハネ福音書」は、物語構成において「出エジプト記」の「モーセ物語」を敷衍していると考えられる節があり、「モーセ」を王的指導者と見る視座が反映しているのかもしれない。

**来週の誕生日 (2 月 11 日~17 日)**

。

**主日礼拝の讃美歌から**

- ・21-208 番「主なる神よ、夜は去りぬ」(= I 24「父のかみよ、夜は去りて」)は、10 世紀にさかのぼるラテン語聖歌で、従来、6 世紀末の教皇大グレゴリウスの作とされていた。曲は、17 世紀フランスの聖歌集所収の曲を転用。
- ・21-198 番「二ひきのさかなと」は、「五千人の給食」の逸話に基づいて、教団讃美歌委員会主催の音楽講習会の中で、教団讃美歌委員の佐伯幸雄牧師が作詞、神学生として参加していた小海基牧師が作曲した。
- ・21-453 番「何ひとつ持たないで」、現代オランダの元カトリック司祭で独立教会「エクレジア」を主宰する H.オースターハウスの作詞したオランダ語歌詞。曲は、カトリック司祭 B.M.ハウベルスがこの歌詞のために作曲。

**21-208「主なる神よ、夜は去りぬ」****Nocte surgentes vigilemus omnes**

1. Nocte surgentes vigilemus omnes, / semper in psalmis meditemur atque / viribus totis Domino canamus / dulciter hymnos,
2. Ut, pio regi pariter canentes, / cum suis sanctis mereamur aulam / ingredi caeli, simul et beatam / ducere vitam.
3. Praestet hoc nobis Deitas beata / Patris ac Nati, pariterque Sancti / Spiritus, cuius resonat per omnem / gloria mundum. Amen.

**21--453「何ひとつ持たないで」****Ik sta voor U**

1. Ik sta voor U in leegte en gemis, / vreemd is uw naam, onvindbaar zijn uw wegen. / Zijt Gij mijn God, sinds mensenheugenis, / dood is mijn lot, hebt Gij geen and're zegen? / Zijt Gij de God bij wie mijn toekomst is? / Heer, ik geloof, waarom staat Gij mij tegen?
2. Mijn dagen zijn door twijfel overmand, / ik ben gevangen in mijn onvermogen. / Hebt Gij mijn naam geschreven in uw hand, / zult Gij mij bergen in uw mededogen? / Mag ik nog levend wonen in uw land, / mag ik nog eenmaal zien met nieuwe ogen?
3. Spreekt Gij het woord dat mij vertroosting geeft / dat mij bevrijdt en opneemt in uw vrede. / Open die wereld die geen einde heeft, / wil alle liefde aan uw zoon besteden. / Wees Gij vandaag mijn brood zowaar Gij leeft. / Gij zijt toch zelf de ziel van mijn gebeden.